
疾風の風

隼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疾風の風

【Nコード】

N7853Y

【作者名】

隼人

【あらすじ】

いつも通り、朝散歩をする。

すると、ある廃れたガレージに着く。

その中には、埃を被ったバイクの姿。

主人公隼人と、そのバイクCBR1000RRとの旅物語。

episode 1 ｾ CBR1000RRとの出会い ｾ (前書き)

どうも！ほかの小説書いてるのに直違う話書いている馬鹿です。

今回、バイクをメインとした話です。オタク要素が入っておりますが、

さほど濃くはありませんので、ご安心ください。

バイクが可愛そうだ！と思った方は、すぐにご退場お願い致します。

episode 1 ～CBR1000RRとの出会い～

それは、ある冬休みのころだった。

いつも通り、朝の散歩。周りには雪。

「（・・・寒いな）」

ただ、暇だからいつも歩く。まあ、独りで寂しいのもあるが。

「（今日は、違う道を行ってみるか）」

道を変える。もちろん、気まぐれで行く。

家族から離れていくくらいだろうか。大学へ行くために、一人暮らしをしていて、帰ってみたら家族は引越していた。

「（ほんと、テーブルに引越しますということだけしか書いてくれてなかったし

どこに居るのかも分からん）」

そして、今はその家で暮らしている。

昔話を思い出しながら歩いてきた。すると、目の前にはすでに廃れたガレージ。

「（・・・？）」

気になったから、空けてみた。中には、埃の被った、バイクだった。

「???」 「おや、誰がいるのですかな？」

「あ・・・、ご老体、このガレージは何かわかりますか？」

老人「いかにも、私のですよ。もうすぐ、この血を離れる予定なので、見に来たのです」

ああ、老人だったのか。謝ろうと思うと、

老人「そのバイクは・・・、差し上げましょうか。元々、孫にあげる予定だったのですが・・・」

「お孫さんがどうかしましたか？」

老人「その子は、バイクが大好きで。バイクの免許が取れたと思うと、事故で・・・死んでしまいました」

「あ・・・、それは失礼なことをお聞きしました。ですが、このバイク」

老人「いいんですよ。あなたは孫ににておる」

「は、はあ。」

老体「ほら、これがキーじゃ」

「あ、有難う御座います」

キーを渡されると、老人は去ってしまった。

「（バイク・・・か。免許は一応取ってあるけど）」

昔、暇だったときに取ってしまった。

「ん？」

バイクには、CBR1000RRとロゴがあった。

「ホンダ・・・か。よろしくな、1000RR。俺は、隼人^{はやと}だ。」

コイツで、何処か行こう。そして、色々なものを見よう。そう思った。

「動くのかな？ このままじゃ帰りたくても帰れん」

とりあえず、キーを挿し、まわしてみる。

ズドロン

といった音と共に、エンジン音が響く。

「おお、カッコいい音だ。そんで、ヘルメットは」

「???」「あれ、君は誰かな？」

「?」

???「バイク、どうしたんだい？」
ライディングスーツを着ている紳士っぽい人であった。

「ああ、いえ。これはもらって、今から持ち帰ろうかなと思いました。ですが、ヘルメットがないんで」

疾風「ああ、それじゃあげようじゃないか。あ、ちなみに僕は疾風^{はやて}よろしく」

「あ、疾風さんですね。僕は隼人です」

疾風「へえ、一文字しか変わらないとはね」

「なんの偶然でしょうか」

ハハハ、と二人で笑う。

疾風「ほら、コレでいいかな」

疾風がバイクから格好良いヘルメットを取り出した。

「え、こんな格好いいのいいんですか？」

疾風「僕じゃ、こんなの派手すぎて無理だよ」

「じゃあ貰えるものは貰うときましよう」

疾風「貰っても嬉しくないものは？」

「そりゃ貰わないですよ」

疾風「だよな」

また二人で笑う。

疾風「あ、連絡先交換しておこうぜ。ケータイ持ってるかい？」

「あ、はい。」

ケータイを取り出す。一応スマートフォンで、画面には・・・

疾風「お、東 projectの射丸 文じゃないか」

「お、正解。知っているってことは好きなキャラクターでも居るんですか？」

疾風「ん」。そうだな、つるぺったんかな」

つるべつたんか。理解もできる。

疾風「とりあえず、メアド交換しようぜ」

「はい」

・
・
・

疾風「それじゃあな。今度一緒に走ろうぜ」

「はい！ それまでに色々合わせておきます」

疾風「それじゃ」

シューーンという音が似合う音で、疾風が走っていった。

「（さて、1000RR。俺等も行くか）」

それに答えたかのように、ブルンブルンとエンジンが唸る。

「さて、出発だ」

まずは家。アクセルを捻る。

「おお、結構早い」

ウィンウィンと、ギアを下げる。

信号が青になる。

ゆっくりと走る。まだ冬だ、風が冷たいけど、気持ちが良い。

・
・
・

「さて、到着だ。ちょっと待っててくれよ、1000RR」
静かにエンジンを止める。

「（確かここら辺に・・・）あつたあつた」

出てきたのは、小さめのステッカー。射名 文のステッカーだ。
あと、電話帳を探る。

「（確か、コイツんちはバイク屋だったはず）」
ピ、ポ、パ、ポ。ぷるるる、ぷるるる。

袁「はい、バイクのことならお任せ、袁^{えん}です」

袁。昔だが、よく一緒に悪戯したもんだ。

「よお、久しぶり。隼人だ」

袁「おお、隼人！で、今回はなんだ？又悪戯か？」

「何時の話だよ・・・。今回は、バイクを見てほしいんだ」

袁「なんだ、バイクか。明日持ってきて来い」

「住所は？」

袁「ああ、・・・」

「さんきゅーな」

袁「お、久しぶりに礼を聞いたぜ」

「そうか？ いつもこんな感じだと思っが」

袁「いや、お前は結構生き生きしてるぜ。じゃ、またな」

「ああ、有難うな。」

ガチャ。電話が切れる。

「さて、ステッカー貼るかな」

コートを背負う。ステッカーとハサミを持って外にでる。

・
・
・

「こんなもんか。なんか、ごめんなさい、老人」

本当にごめんなさい。

「じゃ、通販でいるもん頼んで今日は寝るか……。よし、バイクをどうしようかな」

エンジンをかける。やはりエンジン音が気持ち良い。

「庭に入れとくか。チャリ用の鍵じゃあ心配だけど、仕方ない」

庭に入れる。バリアフリーだったため、出し入れが簡単だ。

「親からの金、まったく使っていないしな。今使うべきかな」

テーブルの上にあった手紙と一緒に置いてあったもの。封筒。

なんと、その中には1億と書かれた小切手だった。

「生活費用はなんだかねで大丈夫だったし。ま、どうせ使ったつたらコイツに使おう。じゃ、お休み1000RR」

・
・
・

「やっぱり旅の思い出にはカメラが欲しいな。一眼レフとデジタルあればいいか」

二つ買い物かごに入れる。

「で、ライダースーツ。ん？ライダースーツで合ってるのかな……。まあいいか。で、どんなのがあるのかな」

ザーっを見ていく。その中にとっても格好いい物があった。

「これは……」

値段は、5万と結構値がするものだったが、

「白。それに、黒い翼。これだっ」

オタク全快。ここまで腐っているとは……。ま、自分の趣味だからいいか。

「ヘルメットは買ったやつでいいし。じゃ、ブーツかな」

一応、ホンダの純正を見ておく。さすがは大手メーカー、色々ある。

「お、TN-M71。これ格好いいなあ。通販であるかな」

あった。よし、これにしよう。

それに、グローブや色々を購入。

「よし、結構買った。これで明日には届くのかな」

時間を設定できるようだから、一応明日にしておいた。

「じゃ、寝るかな」

これで、バイク生活一日目が終わった。

episode 1 ～CBR1000RRとの出会い～（後書き）

ちなみに、この小説は自分の夢と照らし合わせながら書いております。

バイクに乗って旅する。それが僕の夢なのです。

ま、楽しんでいただければと思います。それでは、Good Luck

episode 2 く旅の始まりく（前書き）

どうも、こんにちは。

前回、CBR1000RRとの出会い。そして旅にでる準備。
今回はどうなるのでしょうか？

episode 2 旅の始まり

ピピピッ、ピピピッ

心地良い朝。時計の針は6時を指している。

「なにが心地良いんだか……。」

あたりはまだ暗い。

「さて、準備しよう。それより前には朝飯かな」

パンを焼く。今日の朝飯はそれだけ。

「このサクサク感が堪らない」

これに、マーガリンが一番上手いと思う。

さて、ご飯も食べたし。

「まず、届け物がくるからそれまで遊んでようと、PCを広げる。画面には文。」

「やっぱり可愛い」

オタク全快。これはどうしたものか直せない。

・
・
・

ピンポン

「お、来た来た。はい、ちょっと待ってください」
PCを閉じる。

・

・
「さて、届いた　楽しみだったからなあ・・・」
まず箱を開ける。いっぺん、全部出してみる。

「おお、これがライディングギア」
覚えた。

「で、これが靴で、これがグローブ」
よく見ると、白黒ばつかだ。パンダが好きなわけではない。
よし、と一言言った後で、

「着てみるか」

着てみた。自分で鏡の前に立って見る。

「・・・誰だこのイケメン」
ものすごく似合っていた。（自分的に）
こりゃ気に入る。長く使おう。

「よし、そろそろ時間だ。袁の場所まで行こう」

・
・
・

「おはよう、1000RR。今日からよろしく頼むな」
エンジンをかける。やはり、エンジン音はいい。
ナビも買ったんだ、ついでだし付けていこう。

・
・
・

袁「おお、隼人」

「よう、ご無沙汰」

袁「またカッコいいの乗ってんなあ？高かっただろこれ」

「いや、貰った。っていうより譲り受けた」

袁「！？・・・世の中広いねえ」

袁が悔しそうに自分のバイクを見る。

袁「ま、コイツと走るのが楽しいから、後悔はしてないんだけどな」

・・・袁が格好よく見えた。

「じゃ、よろしく頼む」

袁「あいよ。って、なんだそのキャラ」

「俺のてん・・・いや、好きなキャラクタだよ」

じゃっかん袁に引かれた。

・
・
・

袁「終わったよー」

「おう、サンキュ」

袁「親友のよしみだ、無料でいいぜ」

「え、マジか。じゃあ、そうしてもらおう」

袁「にしても、ライディングギア格好いいな。あの頃のお前が嘘み
たいだ」

何故か、昔の自分は気持ち悪かったのだろうか考えた。

「それはほめ言葉か？」

袁「おうよ」

まあ、ここは有難く思っておこう。

「ありがとな」

袁「じゃ、旅頑張つてな。ばいばい」

「おう、また会おう」

手を振って、袁と離れる。

「（そういえば、ガソリンがあと少しだ・・・）」
ついでに、入れていくことにしよう。

・
・
・

道に隣接しているガソリンステーションに入る。

「えっと、セルフかな」

そこへ、もう一台バイクが入ってくる。横に止まったかと思うと、

「???」あんた、誰？」

と、聞かれた。女の人の声だ。

「え、あ、隼人って言います。」

「???」やっぱ、隼人!？」

・・・?この女の人、自分を知っている。もしかして、

「香織か？」

香織「覚えてくれてたんだー。そ、香織だよー」

しばらく合っていないかった。ちなみにクラスメートだったヤツだ。

どうでもいいが、自分の初恋の相手。

香織「どうしたの？ バイクなんて乗っちゃって」

「いや、旅に出ようかなと思って」

香織「え、貴方も？ 私は、親に裏切られて」

「裏切られた？どういうことだ」

香織「ま、うんざりきたから旅に出ようと思ったの。だから、自分のお金でバイクの免許とってバイク買った。あんたはなんでバイク持ってるのよ」

「譲り受けた。心優しい老人にな」

香織「へえ。ねえ、どうせなら私と一緒に旅しようよ」
「いいぞ。人数は多いほうがいい」

香織「！？」

「どうした？」

香織「一人だけじゃないの？」

「いや、香織とあわせて僕とただけだけど」

香織「良かった・・・」

何がいいんだ？ま、香織と一緒にだ。嬉しいこと限りなし。

「一応ガソリン入れてくから、待っててくれ」

香織「うん、待ってる」

香織のバイクにはカワサキと、Ninjaというロゴがあった。

「忍者・・・か」

なにか、思い当たるものがあつた。

香織「どうかした？」

上目遣いで見てくる。

「いや、そのバイク。格好いいなと思って」

香織「有難う」

「いえいえ」

とりあえず、ガソリンを入れ終わった。

「さて」

香織「行く？」

「ああ。どうせだ、香織。僕の家まで来てくれ」

香織「わかった」。ついてくね」

「おうよ」

二人同時にエンジンをかける。

少しばかり空ぶかしして、

「いくぞ相棒」

走り出した。

・
・
・

ブレーキする。

「ふう、到着」

・・・なんか、家につくたび到着って言ってる気がする。

香織「おお、ここが隼人の家か。じゃ、失礼します」

「まで、勝手に入ろうとするんじゃない」

襟をつかむ。

香織「くえっ。少しばかり首が絞まった」

おっと、やり過ぎたか？

「すまん。じゃ、はいるぞ」

香織「親は？」

「どっか行った」

うん。間違えでは無い。

香織「そっか」

「じゃ、準備してくるから。香織、今日中に出発するけど大丈夫か？」

香織「大丈夫よ。もうガソリンスタンドで会う前から始めてるわ」

「そっか」

親がうざったいからねえ。自分にはよくわからない。

「（親が、まともに接してくれなかったからな）」

香織「どうしたの？（隼人が今悲しそうな顔した・・・）」

「いや、気にしないでくれ」

香織「涙出てるけど？」

「気にしないでくれ」

香織「（心配だわ・・・）分かった」

目から涙がボロボロと零れてくる。親は、勝手だったからな。

「だが、こうして旅させてくれるのは有難い」

香織「どうしたの？」

おっと、心で言ったつもりが口に出てしまった。

「いや、寝言だよ」

香織「寝言は寝て言いなさい！」

二人とも笑った。

・ ・ ・

1000RRのエンジンをかける。

「さて、香織。出発するぞ」

香織「ええ。どこまで？」

「どこだろうな」

香織「え？決めてないの？」

「旅だからな」

そう旅。目的地なんてない。

香織「それもそうね」

そして、二つのエンジン音は走り出した。

episode 2 旅の始まり (後書き)

さて、出発しました、隼人選手と香織選手！

隼人、親に余り可愛がられたことがないことになっておりますが、作者はそうでないです。はい。

次回は、走るのをメインに書いていこうと思います。どうぞ、温かい目で見てください。お願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7853y/>

疾風の風

2011年11月23日14時45分発行